

巻頭言

理事 石井 明

宮入慶之助記念館にとって来年 2013 年は記念すべき重要な年となりましょう。

九州帝国大学医学部衛生学教授の宮入慶之助が鈴木稔とともに筑後川の近くで採取した貝が日本住血吸虫の中間宿主であることをつきとめたのが 1913 年で、それから 100 年になります。

この発見以来、有病各地で官学民による撲滅対策協議会が結成され予防のために多くの先人の努力が続けられたことにより安全宣言・終息宣言が発せられて対策協議会は解散し医療機関からも専門家が次第に減っていきました。

我々はこの節目を迎えて、世界に先駆けてこの病について安全な社会に成し遂げた

この 100 年を振り返るとともに、今後どうあるべきかを考える年にしたいと思います。

たとえば、地球規模での自然環境で考えれば、ミヤイリガイはその生息地に行ってもすぐに見分けることは困難な小さな貝です。また、有病地帯に行っても日本住血吸虫の虫卵もセルカリヤも顕微鏡で専門家が観察しなければ見分けることはできません。安全な状態にはなりましたが、この小さな生物が地上から絶滅した訳ではなく人知れず自然界の片隅で生息しています。病気の終息により全ての体制を終息させるのではなく、これからはこの生物と共生していくという視点での活動を続けるというような考え方が必要ではないでしょうか。

「祖父 慶之助ゆかりの地」を尋ねてーその 1ー

会員 宮入聰一郎

祖父慶之助が、かつて福岡市内で住居を構え、或いは戦後間借りして住んでいた、ゆかりの地を訪ねることにより、現在でこそ新町名へと、又近隣の環境も変化し、ビルやマンションが建っているものの、かつての佇まいを少しでも偲ぶことが出来るのではなかろうかと、かねてより宮入館長の希望もあり、案内かたがた、平成 23 年 10 月 22 日 (土) にほぼ一日かけて当時の町名である、榊木屋 (マスゴヤ) 町、古小鳥 (フルコガラス) 町、西新 (ニシジン) 町、の三カ所を訪ねました。紙面の関係もあり 3 回に分けて報告します。

今回は九州帝国大学医学部衛生学教室の教授として生活していた場所である、旧町名榊木屋町 21 (現町名、中央区唐人町 2 丁目) です。この地は、大正 14 年に 60 歳で退官し東京・練馬に転居した後も本籍としており、また慶之助の末子で筆者の父である守夫が明治 43 年に生まれた後、福岡師範の付属小学校に通学していた住所でもあります。当日は住居地を特定することは出来なかったものの周辺はあまりビルやマンシ

ョンが林立しておらず、一戸建てが多い住宅地でした。

周辺を巡っていると、たまたま 90 歳代とみられる古老 (男性) が通りかかり、これほど思い慶之助の居住地について尋ねたところ、「このあたりは黒田藩の測量所が設置されていた為、榊木屋という名称がついたのだよ。」と聞かされ、初めて町名の由来を知ることとなりました。又、古老が居住したのは、戦後なので戦前のことはよく知らないが、この一帯は戦災により灰燼に帰し遮るものが無く、遠くに博多湾を望むことが出来たとの事でした。この事は、日露戦争当時の明治 38 年 5 月、東郷平八郎率いる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を迎え撃った大砲の轟きを聞いたという祖父の逸話も、さもありなんと感じました。

祖父の九州帝国大学教授時代の住まいであり幼少時代の父の過ごした場所でもある榊木屋町は町名も変わり、戦災後の復旧などで建物も変わり、当時の遺構は見つかりませんでした。

祖父の思い出

会員 小森研一郎

私は、子供の頃に祖母や母から「お前の曾おじいちゃんはとても偉い学者で、人の血を吸って病気をうつす虫を発見して、宮入散という薬を作った人だよ」などと聞かされていました。仏壇には、立派な髭をはやした宮入慶之助博士(以下慶之助と記す)の勲章をもらった時の写真があり、子供の私にも何か偉い人だったんだと漠然と感じていました。

今回は、孫である母が語る慶之助の人物像について書きたいと思います。母は現在も書家として活動しており、この文の題字は母の作品です。

慶之助はどんな家に住んでいたのでしょうか。母によれば東京の豊島園に1軒、福岡に3軒、合計4軒の家を持っていたそうです。九州帝国大学を定年退職した後しばらくは東京の豊島園に住んでおり、母がよく遊びに行ったこの屋敷は二階建てで木の塀にかこまれていたそうです。敷地は二千坪くらいで、テニスが出来るとほどの広い芝生の庭があり、その奥に一段下がった庭がさらに続きそこで野菜を栽培していたそうです。屋敷には二人のお手伝いさんがいて、玄関の大きな引き戸を開けるとまずお手伝いさんが出迎えて奥の部屋へ案内してくれ、しばらくすると慶之助があらわれるといった様子だったそうです。屋敷の二階は慶之助の書斎兼研究室で、モルモットのような実験動物がたくさんいて、長い廊下の両端には二階に上がる階段があり、トイレは二か所あったそうです。日本住血吸虫の中間宿主発見後もこの屋敷で様々な研究をしていたのでしよう。

慶之助は私の母をいつもあだ名で「きよち一、きよち一」と呼んでいたそうです。母の名前は「淳子」(きよこ)と申します。ある日、母がピアノの練習をしていると、下手でうまく弾けずとても聞けるようなものではなかったのに、慶之助は優しく「き

よち一はよく頑張って練習するなあ、偉いぞ、よしよし」と褒めてくれたそうです。また、逆に母がピアノの練習をしていないと「きよち一今日はピアノの練習はどうした、練習はしないのか」と機嫌が悪くなったそうです。

慶之助は礼儀や躰などにも大変厳しい人だったようで、母が子供のころ、慶之助と母そして母の弟の三人で箱根に行く汽車の中で母の弟がふざけて慶之助の頭をポンとたたいた時に、母の弟の腕をひねりあげて「おじいちゃんの頭をたたいたりしたらダメだぞ、貴公は愚人だな」とそれは厳しく叱ったそうです。この「貴公は愚人だな」というのは彼の口癖だったそうです。

自宅でもきちんとした服装で、いつも正座をして読書をしていたそうです。夏のうだるように暑い日でも「暑い」とは一言も言わずに蚊の多い自室で読書や研究をしており、うたたねをしているところを見たことがないとのこと。まさに学者のお手本のような人物だったようです。

このように礼儀正しく自分にも厳しい慶之助でしたが、相当にお酒が好きだったようで、母が遊びに行った時はいつも脇に一升ビンをかかえて出てきたそうです。自分の勉強部屋の大きな机の脇には必ず一升ビンが置いてあり、いつも一升ビンをかかえてうろうろしていたそうです。とにかくお酒が好きだったようですが、飲んでも酔っ払ったり、悪酔いしたり、酒にのまれることは絶対になかったとのこと。

威厳があり近寄り難い、厳しい人物としか見えませんが、本当の慶之助はちょっと厳しいけれどお酒が大好きなみんなに愛された優しいおじいちゃんだったのかもしれない。

記念館活動記録

- 平成 23 年 10 月 2 日 記念館所在地にある岡・神明神社の秋祭りに協賛し、子供みこし参加した児童（約 90 名）に当館特製のクリヤホルダー（JAXA ノートと記念館紹介パンフレット入り）を進呈。
- 平成 23 年 10 月 22 日 宮入聰一郎会員と館長が慶之助の旧居（福岡市栴木屋町、古小鳥町、西新町）について現地調査のため福岡市を訪問。
- 10 月 31 日～11 月 1 日 石井 明、川野 登、渋川眞喜男各会員と館長 4 名が山梨県の日本住吸血虫病関係の遺構調査を実施。三神医院（甲府市）、山梨県立博物館（笛吹市）、杉山なか顕彰碑（甲府市）、当館記念誌の著者の一人である薬袋勝氏のガイドにより、ミヤイリガイ生息地（韮崎市）、昭和町風土伝承館杉浦醫院と流行終息碑（昭和町）、旧流行地などを訪問。
- 11 月 16 日 上記遺構調査でお世話になった薬袋 勝氏が来館。
- 11 月 28 日 館長が信州大学繊維学部平林公男教授を訪問、平成 24 年 3 月に開催される第 64 回日本衛生動物学会大会での当館の展示活動について打合せ。
- 12 月 5 日 館長が山梨県立博物館の小畑茂雄学芸員を表敬訪問。
- 12 月 24 日 長澤 保、田中光男、神山栄治各会員と館長が当館の販売品であるクリヤホルダーの在庫品について意見交換。
- 12 月 25 日 国立科学博物館動物研究部の倉持利明氏が調査のため来館。
- 平成 24 年 1 月 18 日 当館の屋根に太陽光発電システム(3.6KW) の取付け工事が終了。(写真)
- 1 月 21 日 東京都千代田区の学士会館で理事会を開催、カイ発見 100 年記念イベントの企画案 10 件について討議し、当面 3 件につき重点的に推進を決定。
- 1 月 27 日 館長が目黒寄生虫館の小川和夫館長を表敬訪問。
- 2 月 8 日 板倉キイ会員が長野市で開催の認定 NPO 法人セミナーに出席。



(取り付けが完了した太陽光パネル)

会員入会者 (次の方が入会されました。敬称略)

平出 晴男

賛助会員入会者 (次の方が賛助会員に入会されました。順不同、敬称略)

山本 達雄、羽野 義明

ご支援へのお礼 (順不同、敬称略)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

寄 金	萩原 健志、新井 宏侑、宮脇 久夫、宮澤 盛人、高橋 雄造、宮澤 英夫
寄 贈	内田 明彦、目黒寄生虫館

新規会員募集

私たちは、宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、ミヤイリガイを駆除し日本国内を日本住血吸虫症から安全な状態に導いた先人の努力の歴史を末永く伝えることを目標に、記念館の維持・運営、資料の保存・展示・説明・調査・収集、機関紙の発行、展示会・講演会の開催などの活動をしています。

このような活動に参加またはご支援いただける会員を募集しています。

会員種別は以下の通りです。

正会員 当館の活動に参加またはご支援いただける方 年会費 3,000 円

賛助会員 当館の活動に財政的にご支援いただける方 年間 3,000 円以上のご支援

ご希望の方は、電話・手紙・FAX・Eメール (アドレス gmiyairi@triton.ocn.ne.jp) いずれかの方法で事務局までご連絡ください。入会申込書と振り込み用紙をお送りします。

編集後記

● 当館所蔵の宮入慶之助の生涯についての記録には、いくつかの空白があります。

農民出身といわれる彼の父敬長はいかにして松代藩から禄をもらう身分になれたのか、慶之助が明治維新後の北信濃からはるばる東京に進学することができた要因は何か、九州帝国大学を退官した後に東京に転居し新居には研究室をつくり多磨霊園に墓まで買ったのに約 10 年後に再び福岡にもどったのはなぜかなど調査したい事柄です。

今回は宮入聰一郎会員にお願いして福岡での彼の住居について現地を調べて、その結果を連載として執筆いただきました。

● 生前の宮入慶之助を知る人は少なくなっています。今回は小森研一郎会員に慶之助の三女民の娘であられるお母様淳

子様の記憶をまとめていただきました。今後もできるだけ多くの方々に生前の慶之助についての記憶を思い出していただき、記録しておきたいと思います。

● 自然エネルギーへの関心の高まりから太陽光発電についての制度が拡充されました。電気料節約や売電収入などを考慮し、このほど前館長の遺した基金を使用して、太陽光発電システムを設置し寄贈しました。

宮入慶之助記念館だより 第 16 号
発行者

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax (事務局)026(293)3828

(記念館)026(293)4028

ホームページアドレス <http://www5.ocn.ne.jp/~miyairi/>

発行日 2012(平成 24)年 3 月 31 日